

親鸞聖人の否定道

廣瀨 明

一 現實主義と親鸞

誠知 悲哉愚禿癡 沈没於愛慾廣海 迷惑於名利大山 不
喜入正定之數 不快近眞證之證 可恥可傷矣

——『教行信證』信卷——

—

我等の遠い祖先が神の戒めを犯して、禁斷の果實の甘味なるに誘はれ、それを盗み食して樂園より追放せられて以來、人の子は此の地上に枕する所なく、今日は此處明日は彼處とさまよへる猶太人の如く、果しなきさすらひの旅を續けるべく運命づけられた、と云ふ異邦の傳説は、又我等の深い感情の世界に於て共鳴するものがあるやうである。我等は何故とは知らず念々に生じ來る衝動に驅られて、不斷に此の地上を東し或は西して居る。此

の何時終るとも測り得ぬ我等現實に流轉しつゝある姿は一體何を意味して居るであらうか。我等の盲ひたる現實意識は樂園を知らずしてひたすらに現前の事象に應じて猿猴の情を忙がしうして居るのみである。然し狐は住まふべき洞穴を持ち空飛ぶ鳥には憩ふべき罅が待つてゐる。彼等は天真爛漫として大自然の中に遊戯してゐる。強きは堂々と隆え、弱きは従容として天命に安んじてゐる。其の中に人の子のみは何故に安らぶべき現實を持ち得ぬのであらうか。我等は我等の生活の根源に於いて不知不識の間に、我等が曾てその全き生を享樂してゐた遠い樂園をひそかに憶起して居るのではあるまいか。我等の裡にありて而も現實の我のものならざる思慕、それは又此の閉ざされた責罰の囚屋に己が荷へる罪業をうち忘れて、その中に假りそめの惰眠を貪ほらんとしつゝある

盲ひたる魂を呼び醒ましつゝ、久遠の故國に呼び迎へんとする如來の大悲招喚の教命ではないか。久遠の故國を欣ぶ根源の思慕は我等を地上に引き止めんとする「現在せる快樂の虚妄」を知つてそれより脱れ出でようとする。然し「荒く逞しき愛慾を以て、締め搦める手足で此の世にしがみ付」^③かうとする現實意識は「現在せぬ快樂の虚妄であることを知らず」^④、失はれた快樂に更ふるに他の快樂を以てせんとするのである。かくて我等の現實に於ける流轉は、聞えざるにかすかに響き來る大悲招喚の御聲に招き寄せられ、見えざるに戻かに影じ來る彼岸常樂の世界への止み難き思慕に動かさるところに起るものではないか。

現在する愛慾にあきたらぬ我等の現實意識の背後には切に我等を喚び給ふ如來の大悲が動いて居る。我等のあくことを知らざる愛慾の生活は如來よりすれば我等を導生せんとし給ふ善巧方便である。親鸞が感得した夢告として親鸞傳繪の作者が傳ふる「行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」^⑤の言葉は現實愛慾の生活の根源に切なる如來招喚の御聲を聞いて

ゆかれた親鸞の現實觀を表はして居るものと云ひ得るであらう。又名利の大山と迷惑しつつある、我等の貪婪窮まるところを知らざる慾望の外相の背後に潜むものは、一如の大自然界より從果向因して我等盲ひたる者に和光同塵し。やがて一切衆生を攝取せんとし給ふ如來の悲心であるのではないであらうか。名利に迷はざる人間の世界に起つた事件の中で最も悲慘を極めたものの一つである王舍城の悲劇に對して、

彌陀釋迦方便して

阿難目蓮富樓那韋提

達多闍王頻婆沙羅

耆婆月光行雨等。

大聖おの／＼もろともに

凡愚底下のつみひとを

逆惡もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり^⑥

と和讃せられた親鸞の胸中にあつたものは何であつたであらうか。成る程現實の相は淺ましい我執我欲の葛藤であり、名利に迷はされた一族の間に起つた悲劇である。

それは如何にして聖者達の所謂方便の芝居とみることが出来るであらうか。少くとも人生の如實相を見、眞に現實の生に悩みを経験した者であるならば、善導の如く此の悲劇の主人公達が實業の凡夫であることを認めざるを得ぬであらう。親鸞にあつても恐らくは現實相に於いてはそれをなま／＼しい人生事實としてみられたに相違ない。特に家庭的にも社會的にも生涯現世的には恵まれることのなかつた親鸞に於いてはなほさらのことであらう。たゞ現實生活の根源に如來の悲願を感得せられることによりてこそ、始めてあの悲劇を以つて直ちにそのまゝ「釋迦草提の方便」としてうけることが出來たのであらう。

まことに我等欲愛の現實的對象は眼前にある感能的享樂である。然し乍ら歡樂極まつてかへつて深き哀愁を覺ゆる不幸なる我等の愛慾の情は、刹那的感能的享樂をその現實的對象として選びつつも、而もそれを越えその秘くされたる眞實の對象として、遙か彼岸常樂の世界に於ける遊戯を永遠に思慕しつつあるのである。我等の有るが上にも尙ほあらんことを希ふ名利の心はかへつてその

根源にひそむ眞實なる價值へのたち難き願ひを暗示するものである。而して此の「ただ常住のいのちに縫」^⑦らうとする願ひこそ、我等を苦惱の現實より超越せしむるものでありつつ、而も他方限りなき流轉の根源となるものである。

二

我等慾愛に悩みつつある現實生活の根源に如來の悲願を聞き、我等名利に迷へる心惰の裡にそれ等を超えて常住眞實の世界を慕ふかすかなる願ひに覺むる者は、徒らに己が小知見を以て此の現實生活を虚無し去らうとはしない。然し乍らそれは毫も此の愛慾名利の生活をそのまゝに肯定し、そこに安き眠りを續けようとする者でもない。如來の悲心は盲目的隣人愛^⑧にあらはるるものではなく、實に我等現實生活を限りなく批判する際に自己を顯示するのである。如來廻向の清淨な願往生心は汚穢不善を照破することに於いていよ／＼純粹ならんとするのである。それは我等の現實生活が眞實の救濟より遠ざかりつつある悲慘なるものであることを自覺せしむるものである。

眞實の願ひに觸れた西歐の哲人パスカルは云ふ、「慘めな状態にある我々を慰めてくれる唯一のものは氣晴らしである。しかしながらこれは我々の慘めさの最大なるものにほかならぬ。なぜならこれこそ我々が自己を省みるのを殊更に妨げ我々を知らず識らず滅亡させるものだからである」と。彼にとつては我等の名利愛慾に沈迷する生活は悲慘な現實より我等を脱れしむる「堅實な方法」をとらしめぬ恐るべき氣晴らしである。人生の根源に潜む彼岸の世界への切なる思慕は、此の閉ざされたる囚屋としての現實界を厭離せむとして居る。然るに我等の現實意識はそれを眞に自覺することなく、従つて眞に此の現實界の汚穢にして我等の現状の極めて悲慘なるものであることを知ることがない。たゞ移り變はる愛欲名利の情に迷はされ、捨穢欣淨の深き願に與ふるに一時の氣晴らしを以てせんとするのみである。まことに「苦惱の舊里はすてがたくいまだ生まれざる安養の淨土はこひしから」^⑩ざるが我等の現實相である。我等は現實界に苦惱しつゝも直に苦惱する根源を自覺せぬ。我等が現實に苦惱しつゝあるその背後には深き如來の願心が潜んで居る。

如來は苦惱を通じ苦惱を荷負して自己を人生に全現せんとして居る。現實に苦惱する我等の内奥には捨穢欣淨の清淨なる願往生心が動いて居る。我等はそれを自覺せず徒に氣晴らしに自己を慰めようとして六道を輪廻しつゝあるのである。親鸞の宗教が在家の宗教であると云ふことは、決して現實愛欲名利の生活に沈溺する自己を辯護する理由にはならぬ。我等は在家の宗教の名の下に現實生活を肯定し、尙も樂欲の塵藥に酔ひ疲れんとし、名利の互礫に安住せんとする。もとより貪愛の心を離れて我等の生活はない。然し我等の生の現實相が貪愛の心を離れてはないと云ふことゝ、貪愛をそのまゝに肯定し尙その陶酔から醒めぬと云ふことゝは異なる。氣晴らしが我等の生の本來的のものであると自覺する事と、氣晴らしを氣晴らしとして自覺せずなほそこに底迷してゐる事とは同じではない。我等は「沈没於愛欲廣海 迷惑於名利 大山 不喜入正定之數 不快近眞證之證 可恥可傷矣」と云はれた親鸞の悲痛なる自覺を無視してはならぬ。親鸞は決して愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑しつゝ正定之數に入り眞證之證に近づくとは云はれなかつ

た。實に我等が愛欲名利の氣晴らしによる自慰に陥つて居る限り眞實の救濟にあつかることは出来ないのである。然し氣晴らしを氣晴らしと自覺し、愛欲名利に沈迷し眞實の救濟に遠ざかりつゝあるものと知ることは、現實にあつて而も現實を超えた立場が與へられることである。自己の真相を知る事は自己ならざるものによつて始めて可能である。親鸞に於ける凡夫の自覺は現實生活を其のまゝに肯定し、なほそのまゝに惰眠を貪らんとする現實主義者のものではない。それは現實の根源に流れる如來招喚の教命を聞く信心の智慧によりて批判せられた現實の自覺である。眞實の救濟の何たるかに眼醒める事によりてかへつて自己の恥づべき傷むべき現實相を自覺せられたのが親鸞であつた。自ら凡夫なりと稱し、安價な現實主義に身を委ね、口には「佛號むねと修するのではあるが、それが現實を批判し自己の真相を自覺せしむるものである事を知らず、かへつてそれを以つて現實肯定の理由として、「現世をいのる行者」は「これも雜修となづけ」^⑩らるゝのであり、到底眞實の救濟に預かることは出来ぬのである。親鸞が現世を祈ることを却けられた

ことは如何なる意味を持つものであらうか。それは單に形式的祈禱の排斥をのみ意味してゐるのであらうか。「現世をいのる」こと、然しそれは我等の現實生活其のものゝ象徴ではないか。親鸞教徒が一方に於いては凡夫の宗教と云ふ理由の下に軽々しく現實生活をそのまゝに肯定しつゝ、而も他方に於いては排他的に現世祈禱を非難すると云ふことは矛盾したことはないか。誰か現世をいからずして生活しつゝあるものがあるであらうか。現世を祈る心を批判するのは我等のさゝやかな知見ではない。又教權的尺度でもない。それは唯如來清淨の願心によりてのみ始めて批判せらるゝものである。我等は徒に他に向つて謗難の唇をめぐらすよりも、先づ自己が現世を祈る行者として如來の願心によりて批判せられつゝ、あることを自覺すべきではないか。親鸞に於ける煩惱具足の凡夫とは我等の小さなはからひによりて知られたる如きものではなく、實に如來の本願に於いて發見せられた凡夫である。それは眞實の救濟に預けしめられた者が、自己の恐るべき姿を發見した驚きに於いてなされた自覺の言葉である。

三

親鸞の歩まれた念佛道とは我等の現實生活の根源に深き如來招喚の敎命を聞くことに於いて、如來清淨の願心に歸入することに於いて、眞實の救濟より遠ざかりつゝある自己の現實相を發見し、何處までも氣晴らしに停滯し惑溺せんとする怯懦なる自我心を否定して行くことであつた。親鸞によりて見出されたる凡夫の宗教は、我等になほ此の上、名利愛欲の現實生活に安らかな眠りを續けしむるものではなく、却つて眞實の願ひに觸るゝことに於いて、自己の眞相を不斷に自覺せしめて行くものである。地上に枕する所なき我等であるにも拘らずなほも枕する所を此の異境に求めつゝある我等に、眞に枕する所なきを自覺せしむるものが如來の本願である。如來の本願は我等の現實生活を肯定するものではなく、かへつて逆謗の徒たることを自覺せしむるものである。

註① 「さまよへる猶太人」とはキリストが十字架の重荷に喘ぎよるめきながら、或る靴屋の軒下に休まうとした時、彼を放逐した爲に、その應報として何の目的もなく地上を永遠に流浪すべく運命づけられた靴屋アハズエルスのこと(前田利鎌著、宗教的人間による)。

- ② パスカル冥想錄九六(由木康譯)
- ③ ゲーテ・フアウスト
- ④ 冥想錄九六
- ⑤ 親鸞傳繪
- ⑥ 淨土和讃
- ⑦ 北原白秋、印度更紗
- ⑧ ニイチエによりて否定せられたる隣人愛
- ⑨ 冥想錄一一九
- ⑩ 冥想錄一一九
- ⑪ 數異鈔第九章
- ⑫ 高僧和讃

二 理想主義と親鸞

悲哉垢障凡愚 自從無際已來 助正間雜 定散心雜故 出
離無其期 自度流轉輪迴 超過微塵劫 難歸佛願力 難入
大信海 良可傷嗟 深可悲嘆

——『教行信證』化卷——

常に満たされざる心を抱いて、ほとりなき生死の苦海に沈淪しつゝある我等、はかない氣晴らしにやうやく空虚なる自己を慰めんとする我等は、如何なる意味に於てか理想主義者である。我等は「現實は陰鬱で醜惡なもの

だ。」と知ることによつて「明るく光輝に満ちて居る」理想の世界に出でようとする。然し乍ら相對的なる現實の自己によつて知られたる陰鬱で醜惡なる現實の内容は又到底相對的たることをまぬがれぬ。絶對無限なる如來の願心によりて現實の自己の眞相を仄かに感ぜしめられ乍らも、我等の現實の眼はつひに自己の全相を知ることが出来ぬ。たゞ對象化せられたる抽象的自己の投影を見るのみである。若し我等が眞に自己の悲惨なる状態にあることを知つたならば、恐らくそれより脱れ出づべき堅實なる方法を選んだであらう。然し乍ら「彼が『最も卑しき人間』の水準に迄永遠に墜落」して「全く新しい哲學、眞に牢獄の、絶望の哲學、地下室の人物の哲學」^②が發生すべきその重大なる時機に、我々は「卑しき人間」としては自己を知るであらうが「最も卑しき人間」にまで何も「永遠」に墜落しようとはせぬであらう。内に向はねばならぬ我等の眼は外へく／＼とその瞳を向け、自己そのもの、本質的不幸をみずして、外面的に條件的にそれを見るのである。世間出世間一切の理想主義は自己を此の現實の牢獄に閉ぢ籠むる條件を克服し、明るく光輝に満

ちた理想的條件を獲得せんとするにある。此の現實の悲惨を條件的に見る限り、世間的理想主義は物質的であり、出世間の理想主義は精神的であると云ふ相違をもつであらうが、共に外面に眼を向くる點に於いて、即ち自己そのものは永遠に省みらるゝことなく忘却せられて居る點に於いて根源的には同一の地盤に立脚して居るのである。故に一つの條件を克服しそこに理想的條件を實現し得たとしても、それは或る限定せられたる條件の下に於いてのみの救済ではあるであらうが、全體的に自己そのものはその救済の外にあるのである。聖道的理想主義が雜行雜修であるのは一々の志願に應じてそれ／＼の行業が選ばれながらも、其等が能く自己の全體を救ひ、衆生一切の無明を破し一切の志願を満足せしむるものではないからであらう。一々の特殊的志願はその根源に衆生一切の根本的志願をひそむるものではあるが、我等の現實の眼はそれを洞察し得ず、徒に外面的斷片的偶然的雜行雜修に心うばはれ、其等を産み出さねばならなかつた空虚なる自己そのものをかへりみることもなきが故に、永遠に本質的に自己の全體が救はるゝことがないのである。

聖道的理想主義はこの故に必然的に歴劫迂回の行たらざるを得ぬのである。断片的なる行業を集めても全體とはならぬ。部分的行業の集積は自己の全體そのものを救ふことは出来ぬ。雑行雑修に追はるゝ限り我々は「今日明日はある一つのもので一年ののちには外のものに變はるゝ」ものであり、自己そのものは常にそこより除外せられて居り、本質的志願を洞察せずしてなざるゝ行業は全く偶然的恣意的になさるゝものであり、自己の本質は常に忘れられて居るのである。故にかゝる行業は「善い事も悪い事にもすべてが部分的」であつて、それ等の寄せ集めが如何に老大なるものとなつても、結局「残念なことには善くとも悪くともどの一つの断片もその外の一切を駄目に」^③してしまふのである。かゝる世界に終止する限り「哲學も、法學も、醫學も、あらゆるがなの神學も、熱心に勉強して、底の底まで研究」しようが、自己そのものは依然として「こゝにかうしてゐる、氣の毒な己」でしかなく「その癖なんにもしなかつた昔より、ちつともえらくはなつてゐない」^④のである。自己の悲惨なる状態を外的條件の結果としてかゝる断片的偶然的行爲の世

界に住まふ限り「日夜十二時ニ急ニ走シテ急ニ作シテ頭燃ラテ炎ヲガ如ク」すれども根本的に自己そのものは俄然として救はれずしてあるが故に、其等はかへつてすべて「雜毒之善ト名ケ亦虛假之行ト名ケ」らるゝのである。我等は不斷に生の深淵より來る不安におびやかされ乍ら而もその眞相を知らうとせず、徒に外面に眼をそゞが故に堅實なる方法を選ぶ機會を失ひ「聖道權化の方便にひさしくとゞまる」ことによりて自ら苦海の沈淪より出でんとあがきつゝも、かへつてその故に「諸有に流轉の身とぞ」^⑤なれるのである。

其等雑行雑修の世界にさすらふ者は根源的には「安樂淨土をねがひつゝ」も「他力の信をえず」して「佛智不思議をうたがひて」自己の小さな自力執心の愚念する邊地懈怠^⑦に止まる者でもある。「何人も牢獄にあつては泣」かず外面的條件に現實の不幸を見ることによりて「牢獄は永久に續くものではなく何日は終るものである」と思ふことによりて「現實に對する氣持を和け」^⑧新しい世界を「理想的」條件の下に實現しやうと努力するのである。然しそこに實現せられんとして居る世界は眞に新し

い世界であるであらうか。理想的條件なるものは單に色彩の變つた別の牢獄を意味しては居ないであらうか。永遠に自己そのものが新しくせられず、その自己を除外してその「確固たる」基礎の上に組み立てられた新しい條件なるものは、結局古い材料を以て異つた形式のもとに組み立てられた「水晶宮」^⑨でしかないのである。我々の理想主義の意味するところはたゞ「古い生活からもう一つの古い生活に移るにすぎない」のである。親鸞が

三恒河沙の諸佛の

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力かなはで流轉せり。^⑩

と和讃したのも自我といふ「絶對觀念」が確立され、それ自體は永却に問題の外に捨て置いてなさるゝ我等の理想主義の末路を示すものであらう。かくて古い土臺の上に古い材料を以て組み立てらるゝ水晶宮は形こそ異なるであらうが「五十六億七千萬」^⑪年を経るとも決して新しいものとならぬのである此の世界を限る地平線を踏み超えて新らしい無限の世界に出ようとしても一步それ

に近づくことは又それが一步退いてゆくことを意味する。近づくに従つて益々遠ざかるものが聖道的理想主義者の思念しつゝある理想の内容であらう。而して此の聖道的理想主義者は現實の不安に驅られて淨土要門の行者として意識的に淨土往生を願ふに到つても、そこに願はるゝ淨土は諸機各別に思念せらるゝ、懈怠邊地を出でぬのである。それが懈怠邊地と云はるゝのは定散諸機の者の自己認識が徹底せず自己そのものを除外せる外面的反省に止まるが故にかく云はるゝのであらう。又懈怠邊地に止まる者はそれ故に佛智を疑惑するものでもある。自己そのものが根柢から覆へされざる限り、そこに仰がるゝ如來も限りある。自己の分別計度の世界を出でざるものである。自我の所産たる如來は如何に金色燦爛として居るにしても、それは遙かなる淨土に端座して動き給はぬ生命なき如來の佛像にすぎず、此の現實界に立撮即行し來つて大行大信を廻向し給ふ大悲の如來ではない。定散諸善に止まる者は久遠古成の實相身を思念しつゝあるのではあるが、十劫正覺の爲物身を信知せず、畢竟成佛の必然的道路を知らず、自ら偶然的萬行諸善の小路に彷徨

しつゝ、あやふやなる自利各別の信を抱きて必得往生の確信を缺くが故に、雜然たる行業を意識面に於て辛うじて統一しつゝ淨土に廻向し微かに臨終來迎に往生可能の證據を求めざるを得ぬのである。かくて定散諸善に停滯する限り其等の虚假雜毒之善を以て無量光明土に生ぜん

と欲するも必ず不可なのである。

名利愛欲に沈迷することは我々人間のはかない氣晴らしであり、その氣晴らしこそ人間を慰むる唯一のものであり乍ら、而もそれ故にかへつて深き自己認識はさまざまけられ、現實の悲惨より脱れ出づべき堅實なる方法をとらしめざるものであつた。而して又聖道的理想主義もその根源に於いては自己の不幸を感じつつもそれを外面的條件的にみることによりてつひに自己そのものの反省にまで到らぬが故に、萬行諸善の小路に踏み迷つて自己そのものの救済は永遠にもたらされぬのである。

二

現代ヨーロッパの人々がその絢爛たる文化に眩惑せられ、光輝にみちた理想を胸に畫いて居たそのさ中にあつて「悲劇の哲學」者シェストフは彼等にとりて全く許し

難い言葉を放つた。「ドストイェフスキイは突然空と獄

壁、理想と鎖は彼が以前すべての常規の人々と同じやうに望み考へてゐた頃に望み考へたやうな對立的なものでは斷じてないと云ふ事を『見た』のである。對立するものではなく同じものだ。空はないどこにも空はない。あるものはたゞ低い壓しつける『地平線』ばかりだ。人を高める理想などはない。目に見えないが監獄の縛よりもつと固く繋ぎつける鎖があるばかりだ、そして何か偉大な行爲、何か『善い業』によつてその『無期懲役』の地から身を救ふことは人間に許されてゐない」と、そしてなほ他の場所に於いては更に思ひ切つたことを云ふ「人生の中からその本質や能力をすつかり失つてゐる人物が生き續けてゐたりするものである」と。彼が此の様なことを云ふ時それは誰かのことであらう。その様な人間も或はあるのかも知れぬと云ふ程にしか考へることの出來ぬ人は幸ひである。「愛の福音書」^⑬とまで云はれたドストイェフスキイの作品の中からは是の如き陰鬱なる思想を抽き出し、又人間的な光明を見出さうとすれば出來ぬこともないチェーホフの作品を徹底的に絶望の文學とした彼

の眼は果して人間のものであつたであらうか。彼はそれを天使から與へられた「第二視覚」^⑩であると云ふ。而してその第二視覚の意味は「全く答といふもののない問ひを立てるところにある」^⑪と云ふのである。その問ひに答ふべき何物をも人間は持ち得ぬ恐るべき問ひをその第二視覚はみつめて居るのである。

七百年の古、我が親鸞が如來より廻向せられた「信心の智慧」はシェストフが與へられた第二視覚が見ねばならなかつたより以上のものを見つめて居た。諸の由々しき學匠や智者等が殆ど眼をとめなかつた觀經下々品の行者が、親鸞にとつてはそのままに見過ごして行くことの出來ぬ存在となつたのである。行ひすました雲上人にとつて、五逆謗法の重罪人が僅か十聲の念佛によつて淨土に往生出來ると云ふことは全く許し難いことであり、ましてそれが眞實報土に往生出來る等と云ふことは言語道斷のことであつた。然し一應それが經文の上に書かれてあると云ふ理由によりて、それは隨機誘引し給ふ如來の御方便であり、出來たとしても順次生の往生がやうやくにして許されるのであらうと云ふ程にしか見ることが出

來なかつた。又惡人往生を認めようとする人々に於いてすらなほ「惡人なほ往生すいはんや善人をや」とまでは言ふことが出來ても「善人なほもて往生を遂ぐいはんや惡人をや」^⑫と云ふことは出來なかつた。然し親鸞に於いては十方三世の諸佛に見捨てられた五逆謗法の極惡人こそ往生の正因でなければならなかつた。

無量壽佛觀經ニハ定善散善三福九品ノ諸善アルイハ自力ノ稱名念佛ヲトキテ九品往生ヲススメタマヘリ
コ
レハ他力ノ中ニ自力ヲ宗教トシタマヘリ
コノユヘニ
觀經往生トマフスハコレミナ方便化土ノ往生ナリ
コレヲ雙樹林下往生トマフスナリ^⑬

諸師にとりて此の上なき上々品の淨土は、親鸞の「信心の智慧」にとりてはかへつて方便化土として見えたのである。諸師によりて方便とせられたものが親鸞にありては眞實であり、諸師に於いて眞實であつたものが親鸞に於ては方便であつた。「信心の智慧」を境として一切のものは驚くべき價値の轉換を爲したのである。觀經に於いて上々品より下々品に移るに従つてその見る所の來迎佛が次第に劣つてゆき、行者の罪がそれに比例して次第

に増してゆくことは何を物語るのであらうか。常識的理想主義者にとりては九種類の夫々根機の異つた行者がそのもつ善根に應じて見た佛身であるかも知れぬが、前引の三經往生文類の御言葉に従へば、その見方は全く逆轉し、上々品より下々品へと下るに従つて増してゆく罪業は行者の自己認識が次第に深まりゆく象徴であり、來迎佛が次第に貧弱になり行くのは、自己の抱く理想なるものが實は現實と對立するものではなく同じものにすぎぬと云ふことが自覺されて來る象徴であつたのであらう。

「信心の智慧」は決して我等に人間的な慰安を與へてくれるものではない。又我等をしてかりそめの妥協に落ち着かしめるものでもない。如來の願心は決して盲目的憐愍によりて起されるものではなく、一切の雜行を否定し雜修を選捨しつつたゞ純一なる名號を限りなく純一に選擇することに於いて顯はるるものであり、それは信心の智慧として我等の一切の理想主義的努力が虛假雜毒の善であることを自覺せしめてゆくのである。

三

悲哉垢障凡愚自從無際已來助正間雜定散心雜故出離無

其期自度流轉輪迴超過微塵劫難歸佛願力難入大信海良可傷嗟深可悲嘆。我等はこゝに如來の悲願に發見せられた自己に對する親戀の限りなき悲傷をみる。眞實の救濟の何であるかを知ることとは、同時に現實の自己の何であるかを眞實に知ることである。然し斷ち難き現實への愛執はなほ此の地上に望みをつながうとし、自己の小さき知見を固執して自ら流轉輪迴を度らうとする現實の自己にとつて、是の如き自覺は到底耐へ難きことでなければならぬ。一切の賤民的道德・宗教を否定してその「善惡の彼岸」^⑳に超人の道德をうちたてようとしてニイチエは、その「眞に答のない怖しい」哲學から「逃れなければなら」なかつた。その故に「ニイチエの哲學は終り『傳道』^㉑が始」まつたのである。ニイチエを内がはから動かして居た「善惡の彼岸」への大きな意志は「眞に答へのない怖しい問ひ」を發することであつた。相對的人間性にその基礎を置く善・惡の繫縛を永遠に脱することであつた。然るに彼が「超人」^㉒をうちたてた時、彼は再び「善・惡」の世界に顛落したのである。即ちシエストフは云ふ「成る程言葉は變つてゐる、善については語られてゐない、

善の席を超人が占めてゐる。しかし超人の役割は新しくはない」と。彼は固定した限られた「善・悪」の偶像を否定したのではあるが、彼が超人を語つた時既に「彼の超人もまた——たゞ色どりだけが變つた昔の偶像の首にすぎなかつた」のである。それは彼が眞に答のない「人生の怖しい姿に耐へられず、自己の運命と和解ができなかつた」からであつた。親鸞に於ける十九願より二十願への轉入は「善惡の彼岸」への第一歩であつた。然し「行者の爲には非行非善」²⁴であるべき念佛を自己のものとし固定せしめそれを教權化せしむることによりて、念佛は再び善惡の世界に顛落するのである。諸行の隨一として念佛を考へると云ふことは、かく思念するその本人にとりては念佛こそ勝れたものであるのではあらうが、かく思念することは即ち念佛を私し「如來の尊號をおのれが善根」²⁵とするものである。そこに於いては逆謗の罪人が、諸佛に見捨てられた望なき下々品の者が賢しらにも念佛を以て己が善根と爲し、自ら惡を自覺したるものとして心ひそかに他の善人を見下すのである。形の上に於いては十九願は諸行往生であり、二十願は念佛往生であつて

相互に異なるものではあるが、然しそれは單に「色どりだけが變」つて居るに過ぎぬのである。その根柢に於いては本質的差異は全くないのである。超人は一應善惡の世界を超え乍らも、自ら傳道者となり己れを固執することゝに於いて再び矮少化してしまふのである。念佛も一應は諸行を超えつつも、それを自己の所有とする時再び相對化し、諸行隨一の念佛となり終るのである。こゝに於いて超人は今一度自己そのものを超えなければならぬ。二十願の念佛は更に今一度の轉廻を必要とする。こゝに親鸞の二十願より十八願への轉入があるのである。かくして念佛爲本の教は信心爲本の教に轉廻しなければならなかつたのである。こゝに特に注意さるべきは十九願より二十願への外形的轉入と、二十願より十八願への内面的轉入との相違である。十九願より二十願への廻入に於いては、舊き諸行の偶像が否定せられて新しき眞實の法としての名號が我等に與へられたのではあるが、更に此の「新らしき表板」²⁶をも把握し己が善根となすことによりて、それをも單に色どりの相違にすぎぬものとなすが如き我等の定散自力の心そのものに對する他力の淨信によ

る不斷の批判が二十願より十八願への轉入である。「我々の無限の宗教的希望は、我々の無限の政治的絶望の中のみ存するのである」⁽²⁷⁾と云つたメレジュニフスキイの言葉は、以上のことを考慮に入れる時我等のものとなるであらう。諸行と云ふ政治的希望が絶たれそこに念佛の宗教的希望が現はるるのではあるが、念佛をまなほ一種の政治的希望として我々が把持せんとする自力の心が無限に否定せられゆくところに二十願より十八願への限りなき轉入が行はるるのである。無限の政治的絶望と云ふことは、自己は絶望したとすら云ひ得ぬ程の、即ち絶望することに於いてすら絶望する如き絶望である。「眞實は我々がこれを支配しようと願はず『歴史的』要求のため、即ち唯一の吾々に知られた次元の限界内において、これを利用することを断念するその度に應じて、吾々の手に把握されるので」⁽²⁸⁾ある。信心爲本と云ふことも若しそれが固執せられ限定せられて「十九、二十の願の發願や廻向やの自力の信」が自己の「信を信せんとするもので」⁽²⁹⁾ある如きものと同じものとなる時、それは他力の大信を私し「吾々に知られた次元の限界内において、これを利

用」せんとすることであり、「吾々の存在に必要な堅固不易な秩序を地上に樹立」しようとする我等の「秘密と眞實とを殺す」「あの論理」⁽³⁰⁾を以て如來清淨の願心を限定してしまふのである。かくして我等の唯一の宗教的態度は何處までも「佛願の生起本末を開」いてゆくことであり、常に自己の眞相を自覺せしめられてゆくことである。そこに前引の親鸞の限りなき嗟嘆があるのである。人間の恣意はしばしば親鸞の名利愛欲への悲嘆を忘れてそれをそのまゝに肯定し、なほそこに安眠を續けようとする。又自己は既に難思往生の境地を離れ自力執心は全く消え失せたかの如くに思念しようとする。然し「此の星の光りが人間のところへ達するには『苦惱の暗き深淵』に降りて行かなければならない、この深き底に到れば星は見えるであらう。普通の晝の明りにあつてははるかに遠い星辰は——最も輝かしいものとても——人の眼には達しがたい」⁽³¹⁾のである。まことに親鸞のあの悲傷を通じてのみ底なき深淵を通じてのみ、如來廻向の淨信は輝くのである。

註① 悲劇の哲學（芝書店版）三二頁

- ② 悲劇の哲學 五四頁
- ③ 一連の引用文はイプセンの戯曲ブランドの言葉
- ④ ファウスト第一部三五四―三五九
- ⑤ 淨土文類聚鈔十三丁
- ⑥ 淨土和讃
- ⑦ 淨土和讃
- ⑧ 悲劇の哲學五一頁
- ⑨ 悲劇の哲學の言葉空虚なる理想の代名
- ⑩ 正像末和讃
- ⑪ 正像末和讃
- ⑫ ヘーゲル精神現象學の *Notwendigkeit* に對する金子武藏氏の譯語
- ⑬ シェストフ 自明の超克
- ⑭ 虚無よりの創造一三五頁
- ⑮ ドストイェフスキイ「貧しき人々」に對する讃辭
- ⑯ 自明の超克一四頁以下に散見する言葉
- ⑰ 自明の超克 (改造社版) 四七頁
- ⑱ 嘆異鈔第八章

- ⑲ 三經往生文類十二丁左
- ⑳ ニイチェの主著の名による
- ㉑ 一連の引用文はシェストフ著「トルストイとニイチェの教義に於ける善」による
- ㉒ 「見よ我はつねに自らを超克せざるべからざるものなり」―ツアラトストラ―この語によりて「超人」の意味するところを知るであらう
- ㉓ トルストイとニイチェの教義に於ける善三三四頁
- ㉔ 嘆異鈔第八章
- ㉕ 三經往生文類十二丁左
- ㉖ ツアラトストラ二九二頁 (日本評論社版)
- ㉗ メレジュコフスキイ文藝論八二頁
- ㉘ 自明の超克九三頁
- ㉙ 曾我教授、内觀の法藏七九頁
- ㉚ 自明の超克九三頁
- ㉛ 御自釋二九右
- ㉜ トルストイとニイチェの教義に於ける善